

金沢大学考古学研究室 2009 年 6 月 30 日

# 金大考古 第 64 号

*The Archaeological Journal of Kanazawa University* volume 64 June 2009

## 百万石の城下町 —江戸時代の寺町と寺院の形成— 佐々木達夫（金沢大学）

「加賀の寺町と寺院」加賀市歴史文化課長・田嶋正和

「寺町を考える（意見交換）」金沢大学埋蔵文化財調査センター准教授・佐々木花江

私たちが住む北陸には、江戸時代初期に形成された城下町の姿が今も良く残ると言われる。平成 19 年度の金沢大学公開講座「百万石の城下町」では、江戸時代初期の城下町の成立を取り上げたが（佐々木 2007）、その後の城下町の形成、発展についての講義を望む受講生の声が聞かれた。そこで、平成 20 年度（2009 年 1 月 31 日 10 時～17 時）の講義では寺町がどのようにして出来、現在に伝えられたかを講座のテーマにとりあげた。

北陸各地の城下町には江戸時代に寺院が集められて「寺町」が作られた。前田家百万石の城下町金沢では浅野川と犀川の外側に寺院群が配置され、加賀、能登、越中でも藩主や重臣が堂塔を建立し伽藍を整備したが、その大寺院が今も各地に残っている。そうした寺院群の形成と変遷過程を考え、今も残る寺院を訪ねるのは楽しいことと思う。

城下町の絵図に描かれた寺町、発掘調査が行われた寺跡、伝統的建造物群として保存整備されている寺院など、さまざまな歴史資料を用いて調査が行われている。その調査研究成果をもとに、日頃疑問に思っている寺町の歴史的な姿を、この講座で明らかにしてみようと思う。江戸時代の人々が信仰を寄せた寺院の生活や風景を復元し、歴史と伝統の町、金沢の基層文化を江戸時代の城下町のなかに探ってみようではないか。講座は以下の順で進められた。

「寺町と寺院の形成と保存活用」金沢大学教授・佐々木達夫

「越中の寺町と寺院」富山県埋蔵文化財センター課長・宮田進一

「能登の寺町と寺院」七尾市教育委員会係長・善端 直

「金沢の寺町と寺院—東山と寺町—」金沢市文化スポーツ部歴史建造物整備課主任・福塚正浩

「金沢の寺町と寺院—小立野の発掘—」石川県埋蔵文化財センター課長・垣内光次郎

このような目的と提案で金沢大学公開講座が開催されたが、その成果を文章として金大考古の本号で掲載できたのは田嶋発表 1 つとなった。そこで、以下に発表当時の様相を思い起こしながら記すこととする。

佐々木 達夫「寺町と寺院の形成と保存活用」

寺院群は城下町の形成に併せて作られたのだろうか。寺院と武家屋敷、町屋との組み合わせで、城下町ができていると言われる。城下町は広い土地が必要で、町外側に寺が配置されることが結果として多いため、防御施設として利用することが可能である。しかし、防御施設として当初から建造されたとなると、それに該当しない例が多いという指摘もある。寺町形成には、どのような理由が考えられるのだろうか。境内や建築が広いという寺院の特徴は、防衛に適するという理由になるのだろうか。そうだとすれば、日本各地の寺院群はすべて防御的な建造物ということも可能になり、それに対して疑問を呈する人は多い。良く知られる寺院は領主や武家の菩提寺であった。それでは町人の寺はどういうものだったのであろうか。寺院群の配置には時代的な変遷がみられ、防衛というような一つの要素のみで解釈することはきわめて難しい。宗派別に地域的な配置がみられ、街道に沿う要所に寺院群があるという共通性もみられる。宗派によって、武家と町人の寺院という違いもある。江戸時代の茶屋街は浅野川外縁の「ひがし茶屋街」と犀川外縁の「にし茶屋街」にあり、寺院群と茶街・遊郭街が近接していた。こうした、いろいろな様相が絡み合っ、現在見られるような寺院群の姿に変化してきた。現代の寺院群の配置と構造は歴史的な経過をたどりつつある現段階の姿である。周辺地域の変化が激しい今、現在の寺院群の姿を江戸時代の推定復元で補いながら保存し、歴史を偲ぶ文化遺産として活用する方針と方策が検討され

ている。現代の観光市政政策のみでなく、そこに歴史的事実とその解釈、市民の声と要望を生かすことが望まれる（佐々木 2005）。

#### 宮田 進一「越中の寺町と寺院」

高岡城は両側に小矢部川と千保川があり、その間の高くなった部分に築かれている。慶長 14 年（1609）に城の建築工事が始まり、利長が高岡城完成前の慶長 19 年（1614）に亡くなったため、高岡は未完成の城下町となった。高岡城下町の発掘調査例は少ないが、絵図が良く残り、当時の町の状態が絵図からわかる。城と武家屋敷、町屋の配置のなかに寺が散在している。寺院は城のある高位段丘の下の中位段丘にあり、北陸道に沿っても寺院がみられる。町屋には真宗寺院を散在させ、物資流通の要所には寺院と武家屋敷が配置されている。前田利常は町を繁栄させるため、北陸道を城の脇を通るように変更して商業の町を計画し、寺院を町中に移転させて信徒の参詣による町の賑やかさを考えたようである。

富山城は天文 12 年（1543）に築城され、その後、慶長 10 年（1605）から利常が隠居した城となる。城を中心に武家屋敷を配置し、寺社地は城の東側や南側に集められている。川の防御がない東南地域に寺院を配置している。古寺町は城の東にあり、新寺町は東南側の外に配置されている。新寺町は一向宗が増えている。藩主の菩提寺は寺町の北側にある。寺院の配置とその理由は、高岡と富山では異なると考えられる。

#### 善端 直「能登の寺町と寺院」

七尾は畠山氏の戦国時代の城下町であった。その後、利家がすぐに去ったため、七尾に江戸時代の城はなく、商人和町人の町である。畠山氏の七尾（元七尾）に散在して寺院があった。江戸時代初期の小丸城下町は小丸山の城や修理館を中心に形成され、真宗系寺院が御坊町と呼ばれる東方（府中）に、禅宗や法華宗などの寺院は西方（所口）の山の寺にあり、2カ所の寺院群が町を防御するように配置されている。御坊町は街道に沿っている。その後、真宗寺院は武家屋敷などが無くなったため町中心部に移転する。しかし、寺院の配置の変遷をみると、真宗系寺院は町屋を囲むように配置されており、防御とは言えないようである。港の入り江に配置されており、武家屋敷が無くなってから、

寺院は散在するようになった。従って、寺院と城との関係は見られない。七尾においては城下町の寺町ではなく、町の寺町であったといえる。戦国時代の畠山氏の七尾、江戸時代の港を中心にした寺院の配置というように定義できるのではないか。小丸城も港の近くに置かれ、寺院配置は防衛ではなく、港の両側に寺院を置いたと思われる。宗派によってまとめて配置されている。寺院が城との関係ではなく、港町との関係で配置されている例として七尾の特徴がある。

#### 福塚 正浩「金沢の寺町と寺院—東山と寺町—」

寛文 8 年（1668）加賀国金沢之図の配置は当時の金沢の状態を示している。慶長年間に惣構堀の構築があり、都市形成のなかで寺町が形成されている。文政 6 年（1823）金沢町絵図には卯辰山寺院群、寺町寺院群、小立野寺院群という三カ所に防御的な配置で寺院群がみられる。一向宗の監視という意味での配置もみられる。卯辰山寺院群は山麓にあり、狭い曲がる道が特徴的である。寺町寺院群は道に沿って並んでいる。戦災を受けなかった金沢でも、都市改造や火災によって配置が変化している。宝暦 9 年（1759）の金沢大火消失域図によると、寺院の大部分が焼けている。金沢城下図屏風は江戸後期の姿を描いており、石置きの板葺き屋根、こけら葺き・檜皮葺きの屋根、赤瓦の寺院や蔵などの屋根が描かれている。寺院も庫裏や門、本堂、書院、土蔵などという建物によって、赤瓦葺き、こけら葺きであるかが違っている。明治時代の図をみると、建物は同じでも屋根は改修され、赤瓦あるいは黒瓦が葺かれている場合がある。寺町は市電開通で道路が拡張され大きく変容している。土塀が並ぶ寺町の景観はいつごろからのことであったか。建物の建て替えによっても寺町の景観はかなり変容している。

金沢市内には神社が 330 ほど、寺院が 400 近くもあり、明治維新や太平洋戦争で戦災を受けず、これだけ多くの寺社が成り立つ経済的基盤があったためと言われる。浄土真宗の寺院が 210、その内 192 寺は真宗大谷派（東本願寺）である。他宗派の寺院数は江戸初期からほぼ同じであるのに対し、真宗大谷派の寺院の数が 3 倍ほどに増加し、特に大正、昭和期に大幅に増加している。

小立野台地の曹洞宗天徳院を中心とする小立野寺院群、浅野川大橋の北側・卯辰山の麓に広がる卯辰山寺

院群、犀川大橋の南側・寺町台地の先端部に広がる寺町寺院群の3寺院群が寺町を形成するのに対し、真宗寺院だけは町中に散在している。城下町西側の低地部に東西の本願寺別院があるが、江戸期を通して真宗寺院は3つ寺院群の外に立地することが許されていた。このことが明治以降に寺院数が大幅増加した原因の一つかもしれない。

歴史的文化資産としての寺町の保存継承は必要なことか。金沢市は昭和43年から景観に関するさまざまな条例で景観を保全している。寺院建築は調査成果として紹介されている。寺町の伝統的寺院建築などの保存修理と修復整備はかなり進んだが、問題もでている。寺院が造られ始めたころは防衛の面も意識されていたと思われるが、都市計画が進むにつれて、寺院は外郭部に配置されていくことになった。寺院には年中行事があり、宗派に関わらず町の人は寺に集まることが多かったと思われる。町人から見た寺院を検討すること必要であろう。

#### 垣内 光次郎「金沢の寺町と寺院—小立野の発掘—」

小立野に今もある経王寺は慶長10年に創建された。他に波着寺（元和5年建立）、天徳院（元和9年創建）、如来寺（寛文2年建立）などが江戸時代初期に小立野に建てられた寺院である。経王寺遺跡は平成9・10年に発掘調査された。絵図と発掘成果を重ね合わせると、江戸時代の寺跡の状態がよく理解できた。発掘で寺院の跡の状態がわかる例となった。寿福院と天徳院の関連した灰塚と呼ばれる茶毘の跡が土盛りされて塚となって残っている。祭壇の向かいにある火屋には4本柱、溝、白土があった。寂如上人御葬送ノ記の火屋の図に描かれた状態と、発掘で現れた遺構は同じものであった。小立野寺院群は前田家関連の大寺院であり、藩内の寺院を宗教的に統括し、城下町の外郭を管理するために配置されたと思われる。寺院は広い土地が必要なため、町の周辺に配置されることになった。寺院は敷地や建物が広いために、防御という軍事面のことが後で付いてきたことと思われる。

#### 田嶋 正和「加賀の寺町と寺院」

大聖寺は城のない藩邸のみの城下町である。市街地の南側の山際に山の下寺院群がある。城下町ができる前にすでに2カ所に寺があった。真言宗慈光院として

復活し、明治以降は山下神社だけとなった。大聖寺川、城のあった金城山、足軽屋敷と寺が混在して一列に並んで防御的に配置されている。曹洞宗実性院には大聖寺藩の初代から14代までの歴代藩主の墓がある。日蓮宗蓮光寺、曹洞宗全昌寺、日蓮宗宗寿寺、法華宗本光寺、大聖寺藩足軽屋敷、等々が並ぶ。一向宗の寺を町中に移動させて在地から切り離し、お参りにくる人が物を買うことを期待した。寺院配置は敵となる越前方面にある。旧城跡の以前陣を置いた向かいの山に墓を置く。武家の場合は男と女で宗派が違うので、男墓と女墓がある。金沢よりも遅れて町並みが整理され、それに伴って寺院も整備された。浄土真宗は一向一揆を起こしたため城下町内になく、天台宗もない。大聖寺の寺院群は江戸時代に形成された。

#### 佐々木 花江「寺町を考える（意見交換）」

江戸時代の寺院は今も残るが、都市開発で規模は縮小され、変化しつつある現状を保存することが検討されている。寺院建築のみをみても江戸時代の景観と現代の景観は異なる面が多い。江戸時代の寺院がなぜ集まり、どのような建築群としての景観を構成していたか。宗教的な変化もあるが、現代と異なる部分を比較することも江戸時代の寺院と寺町を理解するうえで大事である。社会的な変化と周辺環境の違いがあるから、寺院の保全についても歴史的な評価が必要である。個々の寺院及び相対としての寺院群を調査研究しつつ、歴史的建造物群の景観が町並みのなかで保存活用されている。

#### 参考文献

- 佐々木達夫, 2007「百万石の城下町—その生活と風景—」『金大考古』59:1-2.  
佐々木達夫, 2005「地域歴史遺産の保存」『金沢大学大学教育開放センター紀要』25:17-32.

(e-mail: tatsuosasaki@hotmail.com)